

タイ仏教徒の他界観念に関する一考察

—上座部仏教と伝統的精霊観念の接合—

小野澤正喜

-
- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4. 仏教的功德、輪廻転生と再生の長いサイクル |
| 2. 北タイのプーヤーターヤーイ（祖霊）観 | 5. まとめ—プーヤーターヤーイ着目の意義 |
| 3. プーヤーターヤーイ観念と精霊/生霊観念の接合 | |
-

論文要旨

タイ上座部仏教では僧侶組織（サンガ）における解脱志向の仏教実践と相補関係に立つ功德志向の仏教実践が在家仏教徒レベルに定位している。この体系では伝統的な信仰体系であるクワン（生霊）、ピー（霊的な存在の総称）等の観念は、来世と現世における利益を志向した積善行為（タンブン）と死霊への功德転送の儀礼体系の中に組み込まれている。死霊は仏教的輪廻転生界に入り生死を繰り返すものとされ、祖霊は受動的に功德の転送を受ける存在になっている。

しかし仏教化以前の文化伝統を強く残しているタイ諸族に着目すると、単系出自的な祭祀組織が存在し、祖霊—他界観念も仏教的なそれとは区別される体系を残している。母系の祭祀組織を維持する北部のユアン族、父系の祭祀組織を維持する中央部および東部の黒タイ（ラオソン）族では、仏教的な再生観念と並行して固有の祖霊—再生観念を並存させた二重構造になっている。そこでは一定の世代深度をもった祖霊観念が存在している。死者はプーヤーターヤーイ（祖霊）として特定の空間に留り、3世代前後で元の氏族集団に再生するとされている。それに関連した祖先供養儀礼は生者と祖霊の相互的な対話や請願の側面が強く、功德転送の色彩は弱い。いずれも仏教化が進んでおり仏教的体系も受入れているが、クワンと祖霊に関係した再生の短いサイクルと、仏教的な功德志向の実践とアートマンの実体（ウィンジャー）観念を伴う長いサイクルの体系が統合されることなく並存している。中部タイ仏教徒に見られるクワンとピーの体系 [=小伝統] と死者（ウィンジャー）の体系 [=仏教的大伝統] の習合という二項対立の構図は、単系出自的な祭祀組織が解体した結果として理解されなければならないと思われる。